常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅢ
令和　４年　９月 16 日(金)
その１　通算 257 号

◇ 瞳 輝く時　　hitomi kagayakutoki

シャッターチャンスを逃す。場面を画像でお見せできないのが残念でならない。「瞳　輝く時」。　文面から場面を想像していただけたら、幸いである。

廊下からひょこり教室をのぞくと、前のめりになった体が前方に倒れないよう、机の端に当てた両手をつっぱって体を支える小さな姿が目に入る。八人みな同じなのは、姿勢だけではない。一様にぱっちり開いた眼(まなこ)は、関心の高さの表れだ。

自分の視線を前方に移す。　教師が掲げていたのは「虫かごの絵」。
よく見ると、絵は２枚重ねになっており、虫かごの絵より一回り大きい虫の絵を虫かごが隠す。けれども、虫の姿の一部分がわずかに見える。
この重なった２枚の絵が、子供の心を揺さぶる絶妙な仕掛けとなっている。

「ヒントだ！」
そう察した子供。傾いた体は傾斜が一段と深くなり、瞳は一回り大きく膨らむ。「子供の小さな変化」を教師は見逃さない。虫に重ねた虫かごの絵をゆっくりとずらす。…少しだけずらす。　そしてまた、…ゆっくりと少しだけずらす。

赤と黒が見えた。
まさにその時だ。まん丸に開いた子供たちの黒い瞳が、きらりと光る。
「てんとうむし！」　勢いのある子供たちの声が重なる。

虫かごが取り払われた。赤と黒。てんとうむし。正解だ！

イメージ

笑顔で虹型になった子供たちの瞼(まぶた)。　その奥で輝き続ける瞳が見えるようだ。

教師の「ladybug(レディーバグ)」に続けて、子供たちの「ladybug(レディーバグ)」。　本当にいい声だ。
力強い声に乗せられて「ladybug(レディーバグ)」が虫かごを飛び出し、黒板で腰を下ろした。

１年生 外国語活動。教師の導きによって子供たちの瞳が輝いた 授業の一コマ。

＜おまけ❶＞
テントウムシ。
英語で「セブンスター」かと思ったら、大間違い。正解は「ladybug（レディーバグ）」だ。

「bug」は「虫」。
接頭に着く「lady」とは、女性を表すのではなく、「聖母マリア」なのだそうだ。

この「ladybug（レディーバグ）」はアメリカ英語。　聖母マリアの虫。
イギリス英語では「ladybird」。　聖母マリアの鳥　となる。これは品がある。
さらに昆虫学者は「ladybeetle」と呼ぶとのこと。　聖母マリアのカブトムシ。
いずれも「lady」がつくのは面白い。
どうやら由来は同じらしい。

絵画で表現される聖母マリアは赤色のマントを身に付けていることが多く、赤マントは聖母マリアをあらわすときの通説となっている。
赤マントを纏う姿の重なりから、テントウムシは「lady」ということらしい。

因（ちな）みに、「テントウムシ」を漢字で書くと「天道虫（てんとうむし）」。
丸くてころころと転がりやすいから「転倒虫」ではないのだ。
「てんとう」とは、まさに「お【てんとう】さま」の「天道」。
よって、別名をつけるなら「太陽虫」といったところ。

命名の由来であるが、ネットの一部情報によれば、

てんとう虫は、太陽にむかって飛んでいくことからつけられた名前のよう。
とはいえ、実際てんとう虫は太陽に向かって飛ぶ習性があるわけではなく、
てんとう虫は枝や指など、一番端に行ったときに上に飛び立つ習性をもつ虫。
飛び立つときの様子を、「太陽に向かって飛び立っているように見える」とし、
「天道虫」の名前がついたとされている。
との説あり。

「lady」と「天道」。
日本と西欧との文化の違いがよく表れている一例と言えよう。

＜おまけ❷＞
教師の虫かごの絵。かご網の「網の隙間」を生かせたなら、さらに面白そうだ。
操作すると、網の隙間から虫がちらりと見える…なんてのは、どうだろうか。